

私達の教育改革通信

第289号 2022/9

お願い：教育改革通信はオープンメディアに移行します。編集会員及び協力会員になる方を歓迎します。協力会員は自己負担でコピー、またはEメールで友人・知人へ配布してください。

私達の教育改革通信が今後どう発展するか、皆で育てる方式がよい日本文化に成長することが望まれます。

発行人：西村秀美、先事館箕面〒562-0023 箕面市栗生間谷西 3-15-12

編集：先事館吉祥寺 海野和二郎〒180-0003 吉祥寺南 4-15-12；

先事館狭山 菅野礼司〒589-0022 大阪狭山市西山台 5-5, 2-1009；

先事館奈良 湯浅学 〒630-8101 奈良市青山 8-82；

先事館中野 茂木和行 〒165-0035 中野区白鷺 2-13-3-409

<特集>

「戦争の足音 広島、ウクライナ、そして」

自滅に警鐘を鳴らす映画たち

佐々木 聖

キューバからウクライナへ

ロシア軍のウクライナ侵攻をきっかけに、ヨーロッパでは地下シェルターのメーカーへの問い合わせが殺到した。プーチン大統領が西側諸国の出方しだいで戦術核の使用も匂わせ、核戦争の脅威が絵空事ではなくなったからだ。パリの地下シェルター業者には、それまで月に1件、問い合わせがあるかないかだったのに、侵攻が始まり1か月強で1,200件にもなった。同社の長期滞在できるタイプの地下シェルターの価格は約20㎡で平均30万ユーロ(約4,100万円)だとか(2022年5月10付「日本経済新聞」)。

人類は第三次世界大戦すなわち核兵器使用の全面戦争に至りかねない道への扉を再び開け、二度目の自滅の危機に直面した。各国の相互依存が強まるグローバル経済の進展で世界大戦は回避される、との多くの識者の観測は楽観的すぎたのか。侵攻と抵抗が膠着状態の今なお、その危機は続いている。

一度目の危機は冷戦時代の「キューバ危機」(1962年)だ。キューバで秘密裏に建設中の核ミサイル基地の撤去をアメリカが旧ソ連に要求し、キューバを海上封鎖した。核のボタンが押される寸前まで紛争は混迷を極めたが、ケネディ大統領とフルシチョフ第一書記が書簡を交わし、基地建設は中止。自滅へ転落

する道から引き返し、扉はかろうじて閉じられた。

今回の「ウクライナ危機」には、より複雑な背景があり、何よりすでに戦争で多くの市民が犠牲になっている。片方の首脳が独善的な歴史認識に基づく帝国主義の理想を抱く独裁者だけに危機の度合はより深刻に見えるが、その裏には、戦争がだらだらと続いてくれないと、武器・兵器を供給する(政府と一体化した)巨大な軍産複合体を維持できない大国ならではの宿痾もあるだろう。兵力を投入せず、最先端の兵器を供与するだけの戦争は、誤解を恐れずにあえていえば、ヨーロッパ諸国と手を携えてウクライナを間接的に軍事支援する海の向こうの大国にとって“都合が良い”。

1973年に深作欣二(監督)と笠原和夫(脚本)が映画『仁義なき戦い 代理戦争』で喝破したように、やくざの抗争であれ国家の戦争であれ、いつだって、ぬくぬくと生き長らえるのは双方の統治権力と既得権益層であり、命を落とすのは、大組織や大国間の代理戦争で“鉄砲玉”として利用されるチンピラ、前線に送り込まれる兵士、巻き添えになる無辜の民間人である。この愚かな所業の繰り返しは核兵器の抑止力に名を借りた軍拡競争となり、やがて自滅へと至る道でしかない。果たして人類は引き返せるのか。

「目は開いておけよ」

キューバ危機を背景にして地下の核シェルターが登場するアメリカ映画に『マチネー 土曜の午後はキスで始まる』(1993年/ジョー・ダンテ監督)がある。日本公開時のしゃれた副題が示すように、ティーンエイジャーたちが主人公のドタバタ・コメディだ。

舞台は1962年のキーウェスト。フロリダ半島からメキシコ湾の南西に伸びる諸島の西端の陽光あふれるリゾート地で、海軍基地があり、キューバは目と鼻の先だ。町が戦争の最前線になるのではと不安な日々を送る市民だが、子どもたちはのびのびとスクールライフを満喫している。父親が海軍で海上封鎖の任務につく主人公の転校生の少年はB級ホラー映画の大ファンで、新作映画の宣伝のため町にやってきた憧れの監督とひょんなことから知り合う。リベラルな思想の持ち主の父母に育てられ、ソ連を「悪」とみなして空襲に備える学校の避難訓練を断固として拒否し謹慎処分を受ける、やはり転校生の少女と、主人公の少年の、親の立場が違う同士で惹かれ合う淡い初恋が描かれる。

映画の公開初日、土曜のマチネー（昼興行）は、上映中に座席から水や煙が出る特殊効果の仕掛けで観客は大盛り上がりだが、ガールフレンドをめぐる男の子たちが大げんかに。館内を逃げ回る主人公のカップルは、映画館主が核爆弾から逃れるため密かに設けていた地下の核シェルターに誤って閉じ込められてしまう。場内では突然スクリーンが爆発して火を吹き、巨大なきのこ雲が映し出される。観客はパニックを起こして逃げ惑う。地下シェルター内のカップルも爆音を聞いて、ついに核戦争が起こったと思う。だが実は特殊効果の暴走で映画館の2階席が崩落しそうになっただけ――。

たわいないといえわたわいないコメディ映画だ。しかし、テレビ報道の画面から時々刻々と伝わる核戦争への恐怖の一方で、放射能汚染で変異した“蟻人間”の襲来などという、往時の時節柄でも、現在のPC（Political Correctness＝差別や偏見のない政治的妥当性）の見地からも“不適切”なホラー映画を確信的につくる映画監督や、いつの時代も変わらない青春を謳歌するティーンエイジャーたちの、どんなにひどい世の中になっても、しぶとく己の本分を發揮していくたくましが、不敵な笑いの中に浮かび上がる。

とりわけ映画監督に扮する巨漢の名バイプレーヤ

一、ジョン・グッドマンが素晴らしい。俗悪、子どもだまし、と罵られても人を驚かせ楽しませるのが大好き。あまりの怖さに観客がショック死したら死亡保険金を支払うとする怪しい宣伝戦略や、ぞくりとする場面でいくつかの客席に弱電流を流して悲鳴を誘発する、といった仕掛けを連発した50～60年代のB級映画監督、ウィリアム・キャッスルがモデルらしい。ラストで主人公の少年少女に「目は開いておけよ」と告げて町を去るのが素敵だ――恐怖に目をふさぐな、自分で真偽を見極めろ。ハリウッドの“赤狩り”を描いた『トランボ』（2015年／ジェイ・ローチ監督、216号参照）で、非米活動委員会で証言を拒み投獄され、メジャースタジオから締め出されたダルトン・トランボにB級ホラー映画の脚本を任せる製作者、キング兄弟の長兄にグッドマンが扮している。これは『マチネー』にオマージュを捧げたキャスティングにちがいない。

いつもと変わらない尊さ

核戦争の恐怖を黒い笑いで包んだのは、キューバ危機の翌年に公開されたスタンリー・キューブリック監督の名高い『博士の異常な愛情 または私は如何にして心配するのを止めて水爆を愛するようになったか』だ。一方、より直截に、原水爆による最終戦争から人類滅亡への過程を描いたポリティカル・フィクションなら、ネヴィル・シュートの小説『渚にて』（1957年）の2本の映画化作品を忘れるわけにはいかない。

最初は1959年、スタンリー・クレイマー監督によってハリウッドで映画化された。原作どおり、米ソの開戦による第三次世界大戦が勃発し、世界各地で核爆弾が炸裂、北半球は濃密な放射能に汚染され、人々は死滅した、という設定だ。かろうじて生き残った米国の原子力潜水艦が、まだ無事のオーストラリアのメルボルンに退避してくる。放射性物質は次第に南下し、人類最期の日が刻々と近づいてくるなか、一縷の望みがもたらされた。米国のシアトルから、途切れ途切れのモールス信号が届いたのだ。果たして生存者がいるのか。原潜は米国に向け出航するが――。

妻子を核爆弾で亡くした原潜の艦長にグレゴリー・ペック、同乗し北半球に赴く若い海軍士官にアンソニー・パーキンス、艦長に恋心を寄せる女性にエヴァ・ガードナー、原子力科学者にフレッド・アステアと豪華キャストで悲痛な人類最期の日々が描かれる。

二度目の映画化（正確に言えばテレビムービー化。かつてはテレビ用に撮られた単発の長時間ドラマを“テレビムービー”もしくは“テレビチャー”と呼んだ）は2000年、原作の舞台であるオーストラリアでつくられた。日本では『エンド・オブ・ザ・ワールド』（ラッセル・マルケイ監督）のタイトルでDVDリリースされた。こちらは旧ソ連崩壊後の時代なので、核戦争は米国と中国の間で起こるという設定。しかも台湾をめぐる。20年以上前の作品だが、まるで今の時代に考えられたようではないか。北半球からのモース信号は電子メールに変えられている。

何も知らずに笑う赤ちゃんにもう未来はなく、地球上で唯一残されたオーストラリア政府ができるのは、じわじわと放射能に蝕まれ苦しまずにすむ安楽死の薬を人々に配ることしかない。人類の馬鹿さ加減を徹底的に頭に叩き込まれるこの二つの作品を、戦争に関わる世界中のすべての愚かな為政者の首根っこをひつつかんで座席に縛り上げ、強制的に観せてやりたい。それしか人類が後戻りできる道はないのではないか。

1959年のハリウッド版はさすがに古色蒼然としているが、2000年のオーストラリア版は、艦長のアーマンド・アサンテと相手役の女性のレイチェル・ウォード（両者とも素晴らしい俳優でこの作品はベストカップルの好例）の抑制の効いた演技のおかげで、人類の愚かさへの悔恨の情が波のようにひたひたと押し寄せ、痛いほどせつない。列車内での二人の偶然の出会いは、軍人嫌いのレイチェル・ウォードのつっけんどんな態度のせいで、互いに最悪の印象だった。なのにだんだんと惹かれ合う。その顛末が、酸いも甘いも噛み分けた大人の恋路として、ロマンチックに描かれる。一方、最後まで希望を捨てず、北半球にも生存者がいるはずだと思ひ込む人たちが、都合の悪い

情報を無視したり過小評価する「正常性バイアス」に陥っている様子も差し挟まれ、手ぬかりがない。

任務を全うしたり、人を愛したり、人と別れたり、飲んだくれたり……誰もが普通の人生を送っていたのに、それがあの日、為政者たちの愚行によって終末を迎える理不尽さは筆舌に尽くし難い。その理不尽さを超えてなお、ヒトとしての営みに愛おしさを感じるのは、最悪の最期を迎える予感を抱きつつも、大切な家族や友人や恋人と、いつもと変わらない平穏な日々を送るからだ。『マチネー 土曜の午後はキッスで始まる』も『渚にて』も『エンド・オブ・ザ・ワールド』も、そのことの尊さを教えてくれる。

戦争とメディア雑感

校条諭

◇ハイブリッド報道の進行

ハイブリッド戦争と呼ばれるのはウクライナ戦争（ロシアのウクライナ侵略で始まった戦争）がはじめてではない。しかし、戦争におけるハイブリッド報道というのはこれまであまり言われてない。最も顕著な特徴は、現地の市民がスマートフォン（スマホ）で撮影した映像が SNS を通じて多数発信されていることである。それを米欧のマスメディアが取り上げて、世界に向けて発信している。その場合、元の映像がフェイクでないかどうかを判断するのがメディアとしてはもっとも神経を使う点である。下手をすると事実に基づかないプロパガンダに手を貸すことになるからだ。

最近では映像制作・加工技術も高度化していることで、判断の困難度が増している。AI を活用して、加工ではなく「創作」さえできるようになってきている。それに対して、報道側は同じ地域から発せられた複数の映像を比較するとか、別地域の過去の映像を使ったものではないかをチェックするといった作業を地道に行っている。

ロシアは当然ながら、ウクライナの通信インフラに物理的にあるいはサイバー攻撃の形でウクライナの

政府や国民のインターネットの受・発信を困難にしようと注力してきた。それに対して、テスラの総帥イーロン・マスクが衛星通信インフラ「スターリンク」を提供した貢献は大きい。ウクライナのデジタル担当大臣がツイッターにて、SpaceX の創業者イーロン・マスクに支援を要請したしたのは開戦直後の2月26日。これに対し、マスクはすぐさま支援を表明し、ウクライナでスターリンクのサービスを開始したことを明らかにした。この間、わずか10時間半。ツイッターを通じてこのような重要なことが超スピードで決まったのは、一般個人から大国の権力者までがSNSを用いて発信をするようになった時代の象徴的なできごとである。

なお、サイバー攻撃に関しては、マイクロソフト社がウクライナ国内のセキュリティ確保を担っているとのことである。

◇戦争報道から真実を得られるか

ところで、メディア論を専門とする佐藤卓己（京都大学大学院教授）は、雑誌「Voice」2022年9月号で「戦争報道に『真実』を求めてはいけない」と題する論考を発表している。「満州事変も柳条湖事件という壮大なフェイク・ニュースから始まった」ように、SNSの登場以前からフェイク・ニュースが戦争では普通であると指摘。現代の例のひとつとして、1991年から始まった湾岸戦争時の「ナイーラ事件」を佐藤はあげている。イラク兵が病院にいた未熟児を保育器から取りだして死亡させた様子を「目撃」したという証言が、実はアメリカのPR会社がクウェート政府から資金を得て演出したものだったという。このニュースは反イラクの国際世論の高まりをあと押しした。

2003年開始のイラク戦争の際には、イラクが大量破壊兵器を隠し持っているというのが開戦の根拠となったが、これも壮大なフェイク・ニュースだった。ニューヨーク・タイムズも政府の判断に同調し、国民世論の過熱に抗することはなかった。そこで思い出すのは、かつてのベトナム戦争に関して、同紙の記者デイビッド・ハルバースタムが著した『ベスト・アンド・ブライテスト』（原著1969年）である。「最良にして

最も聡明な」人びとが、なぜ、ベトナム戦争という非道かつ愚かな泥沼へとアメリカを引きずりこんでいったかを描いた名著である。その教訓をニューヨーク・タイムズは、数十年後に生かし切れなかったことになる。

◇日本の新聞 戦争報道が部数を伸ばした

ここで日本のメディアの過去の戦争報道に目を向けると、最初に思い浮かぶのは、1874年（明治7年）の台湾出兵に際して、初の従軍記者として参加した岸田吟香である。当時41歳。吟香の前歴も興味深いがここでは省略する。吟香は1872年創刊の東京日日新聞（現在の毎日新聞）の主筆に頼まれて編集に加わった。その後、明治政府が台湾出兵を決定、吟香が従軍しようとする、機密を重視する戦闘にスパイのような者を従軍させるわけはいかないという軍当局の反応。そこで、人脈を活用して、軍御用の大倉組手代という資格で従軍できることになった。吟香が台湾から送ったルポは連載記事となり独占報道として評判になった。自ら描いた挿絵も添えて人気を得、東京日日の発行部数を大きく伸ばした。

戦争報道は新聞の部数拡大に寄与するという現象は、後年の、日清・日露戦争やアジア太平洋戦争においても顕著に見られた。日本の中国侵略に端を発するアジア太平洋戦争においては、当局の規制により大本営発表をうのみにした記事しか掲載できなかったというのは事実である。しかし、新聞は単なる被害者ではなかった。新聞の戦意高揚記事が大衆の興奮をあおり、大衆意識に新聞も引きずられ、部数向上のため大衆受けする記事を進んで掲載した。

◇特派員の役割の変化

ベトナム戦争においては、日本からも新聞やテレビといったマスメディアの特派員やフリージャーナリスト、作家などが現地入りして、臨場感あふれるレポートを現地から送ってきた。ここで思い出されるのは、新聞の海外特派員のそれまでの一般的なイメージである。それは、英語など外国語が強い人で、現地の新聞や当局の発表を翻訳して送ってくるデスクワーク中心のインテリというものだった。毎日新聞の大森実

はそのイメージを大きく変えたひとりである。国際事件記者を自称する大森は社会部の現場主義の文化を外信部（外報部）に持ち込んだのだ。外信部長として特派員7人をベトナムに派遣して新聞に連載した「泥と炎のインドシナ」は、当時の新聞界の雄朝日新聞のベトナム報道の上を行くとの評価を得た。

日経新聞の元特別編集委員伊奈久喜は「戦争報道はメディアの究極の使命」と題する一文（国際安全保障第32巻第3号の序文）の中で、湾岸戦争時にワシントン支局からサウジアラビアに派遣された朝日新聞外報部の川崎剛記者のことを取り上げている。川崎はサウジで湾岸戦争取材したただひとりの同社記者だった。「私の最大の任務は『そこにいること』になったのである。戦況を報道する新聞紙面で、クレジットにサウジアラビアがあることは、新聞社に欠かせなかった」という川崎の言葉を伊奈は引用している。湾岸戦争の折のサウジでの米軍会見は一種のメディアショーだったと伊奈は言う。「川崎記者はイヤホンをつけていた記者に気づく。本社から質問の指示が出されていたのだという。その場においてこそ知りうる事実である」（伊奈）。

CNNの存在を世界に知らしめたのはまさに湾岸戦争だったということも改めて想起させられる。

毎日新聞の元エルサレム支局長大治朋子は最近のオンラインセミナーで「ニオイを嗅ぐ」という話をした（TBSラジオ・毎日新聞共催「戦争とメディアー今伝えるべきことは何なのか」2022/8/22）。パレスチナ・ガザ地区へのイスラエルの攻撃が時に起きるが、するとイスラエルはガザとの国境の検問所を閉める。イスラエルにいる特派員は国境が閉められる前に”ニオイ”を感じて、ガザ地区に入らなくては現地取材ができないというのである。特派員としては、鋭敏に情勢をキャッチして、ガザ地区への取材へ出かけるのだが、「戦争保険」などの関係もあり、東京の本社の承認を取らなくてはならない。毎日新聞ではデスクの一声でOKとなり、時にやむなく事後承諾となったが、「あ、そう」のひとつですんだという。社によっては、役員承認まで必要なため、結果的に間に合わず、イスラ

エル側だけからの情報を報じるはめにもなったりする。

◇取材規制の強化、戦争自体の変化

1975年に終結するまで約20年間続いたベトナム戦争。そこでの外国メディアの取材は米軍への従軍による取材を含め、ある程度自由に行われた。とはいえ、北ベトナムや南ベトナム民族解放戦線（当時ベトコンと呼ばれた）への直接の取材はなかなか難しかった。毎日の大森実は西側の記者として初めてハノイに入り、ライ病院が米軍によって爆撃されていると映像で見て報道した。それに対してライシャワー駐日大使が、北の宣伝に乗せられていると非難、毎日は大森を守り切れず、大森は退社した。後年、ペンタゴンペーパーズを入手して報じたニール・シーハン（ニューヨーク・タイムズ）の証言などにより大森の報道は正しかったことが証明されている。

当時、日本テレビのノンフィクション「南ベトナム海兵大隊戦記」やTBSテレビの田英夫の報道も反米的であるとして日本政府からにらまれるようになっていた。

アメリカでは、現地からの写真や記事を載せた新聞や雑誌によって、国民が戦争の大義を疑い始め、戦況の泥沼状態を知ることになった。当時世界に名がとどろいていた雑誌LIFEには、岡村昭彦が撮影した写真がしばしば載った。岡村が書いた『南ベトナム戦争従軍記』（岩波新書、1965年）はベストセラーとなった。アメリカ内外の反戦運動も活発になっていった。そして、結局超大国アメリカが敗北する結果となった。その後、米政府と米軍は、ベトナム戦争での“教訓”を7踏まえ、以後の海外遠征では、取材を強く規制するようになった。そうして、前述の湾岸戦争やイラク戦争での強力な取材規制につながった。

同時に戦争自体も変化していった。米本土にいながら無人機を操作し、あたかもコンピューターゲームのように、対象物を攻撃していくようになった。取材規制のもと、現場の生身の人間の悲惨な状況は伝えるのが困難となり、かわりにディスプレイ上のゲーム的攻撃場面が盛んに報道されるようになった。インターネ

ットやスマホはまだ登場しておらず、現地の人が自ら現場の様を発信するすべもなかった。

◇ウクライナ戦争が示す戦争報道の新段階

近代以後、新聞をはじめとするマスメディアが発達するようになって、戦争報道は従軍記者という形で始まり、少しずつ風穴があげられていった。ベトナム戦争においては、従軍だけでなく、さまざまな形で戦地に入り込む取材・報道が繰り返された。もちろん、どんな場合であれ戦争報道はさまざまな困難を伴い、その中で命を落とした記者もかなりの数にのぼった。湾岸戦争やイラク戦争においては、戦争当事国の政府や軍からの規制が強化され、その困難さがいっそう増すことになった。

今次のウクライナ戦争の報道においては、メディア環境の変化が大きな影響を与えて、ウクライナにとって武器だけではない大きな力になっている。まず、本稿冒頭で述べたように、ウクライナ国内の組織や市民による現場からの情報の発信がインターネットとスマホの活用により活発に行われていることがあげられる。ロシアによると見られる住宅や施設の爆破の現場映像がどんどん SNS で流れてくる。もちろん、その中にはフェイクも混ざっているかもしれない。しかし、それらが真実かフェイクかを判別する技術も向上している。その現象を表すキーワードは「オシント (Open Source Intelligence)」と「データジャーナリズム」である。

オシントについては、ベリングキャットという純民間の国際的ネットワークグループが大きな貢献をしている。そのメンバーの中核はジャーナリストではなく技術者である。SNS に上がっている映像など複数の公開情報を照らし合わせるなどして信用できる情報かどうかを判断する。ウクライナ戦争においては、侵略初期の頃、ロシアがクラスター爆弾を用いていることを証明した。ベリングキャットがはじめてその名をとどろかせたのは、2014 年にウクライナ東部で発生したマレーシア航空機撃墜がロシア軍仕業であるということを暴いたことであった。

日本の主要メディアの記者もベリングキャットによる研修を受けて報道に生かしている。NHK は、クーデターで軍部が支配するミャンマーで起きた抗議デモに参加していた 19 歳女性の死が軍の発砲によるものだという事実を映像分析により突き止めた。

毎日新聞は 2022 年の元日掲載の「オシント新時代」と題する連載で、Yahoo! ニュースの記事のコメント欄に付いた読者の書き込みが、ロシアの政府系メディアによって違った意味に翻訳され、引用されていることを報じた。

そのオシントと重なることが多いのがデータジャーナリズムという概念である。たとえば、東大情報学環の渡邊英徳教授は、ウクライナの戦場を写した衛星画像や市民の撮影した画像をデータとしてマッピングしていく作業をしている。オシントは、何らかの公開情報に注目するという意味が中心で、実際には特定事案の真偽を検証する目的のことが多いが、データジャーナリズムはテーマに沿った多数のデータを集めて広く状況を明らかにすることを目的とする。戦争に関してではないが、日経電子版の「データで読む地域再生」や朝日新聞デジタルの「みえない交差点」といった特集に見るように、データジャーナリズムが盛んになってきている。

オシントないしデータジャーナリズムの特徴は、現場に行かなくても一定の事実を明らかにすることができる点にある。しかし、たとえば、最近朝日新聞の高野遼記者がウクライナのヤヒドネ村から報じた「住民全員が監禁された村 地下室に 28 日間」というレポート (2022/8/18) ひとつをとっても、特派員の存在価値を実感させてくれる。実際に地下室に足を踏み入れて現場を見、においを嗅ぎ、地獄を味わった人々の声を直接聞くというのは、他の方法では得られない。

ただし、戦争において、どんなに素直に事実をつかもうとしても、記者が動き読者が見聞きする空間は、物理的にも意識的にも反ロシアという舞台 (いわゆる西側) の上であるということも忘れられない。佐藤卓己の「戦争報道に真実を求めてはならない」という言葉が改めて想起される。しかし、記者・ジャーナリス

トは、誤報をも恐れずに「歴史の第一稿を記す」ことに果敢に取り組んでほしいと私は期待する。どのみち、歴史は追って更新されていくものだ。(文中敬称略)

[参考文献] (本文中紹介分を除く)

武田徹『戦争報道』ちくま新書、2003

佐藤卓己『流言のメディア史』岩波新書、2019

杉田弘毅『国際報道を問いなおす—ウクライナ戦争とメディアの使命』ちくま新書、2022

土屋礼子編著『近代日本メディア人物誌』ミネルヴァ書房、創始者・経営者編 2009、ジャーナリスト編 2018

記憶の継承を考える 77年目の広島から

中澤晶子

世界中でよく知られている日本の都市は、どこだろう。東京？もちろん、そうかもしれない。そして？

「HIROSHIMA は、大丈夫か」「もう放射能はないのか」「人が住めるのか」。海外に出て、小さな田舎町の小さなホテルで記帳するとき、筆者の書く HIROSHIMA の文字に、人々は反応する。大きく、小さく、さまざまに。今となっては名前も定かでない町の、名前も知らない人々。大阪や名古屋は知らなくとも、広島は知っていた、あの人たち。

一般的に広島は、「初の原爆が投下された町」と表現される。けれども、そのたびに筆者は、「人類初の核攻撃を受けた町」と心の中でつぶやき返す。そして、それが、不幸にも今の時代に起こりうるものが、何より恐ろしい。どこかが、再び「核攻撃」を受けるのではないかと想像する、引き金のような言い方に思えるので。

秋風が立ち、夾竹桃の季節が終わった。毎年、広島の夏は、この花の開花から始まる。町のそこここにひっそりと立つ慰霊碑に、夏の花が手向けられ、人々は「あの日」が近づくのを感じる。河岸の夾竹桃が盛りとなり、8月6日がやってくる。敗戦から77年、「あの赤い花を見ると、思い出す」とつぶやく被爆者も、平均年齢が84歳を超えた。繰り返し繰り返し、我が身を刻むように修学旅行の子どもたちに当時を語る証言者も、その多くが彼岸の人となり、当時と現在を

つなぐ糸は、細くなるばかりだ。

これまで20数年にわたり、横浜の中学生たちの広島修学旅行をサポートしてきた筆者は、平和学習に関わる教師たちの、「被爆者から直に証言を聴けなくなる日」への不安を耳にしてきた。「聴けなくなる日」は現実となり、この1年で何度、悲報を聞いたことだろう。あんなにお元気だったのに。とは言え、あの方は90を超えておられた、というような嘆息が続く。

例えば、広島を訪れる子どもたちは、14万人分の顔を新聞や雑誌から切り抜き、模造紙に貼り、殺された14万ひとりひとりの死を確認する、というような、工夫を凝らした事前学習を重ねる。子どもたちは、広島の地に降り立ち、被爆者から体験を直に聴くことで、積み重ねたものを「確認」し、気持ちを新たに次のステップを踏み出そうとする。これまでは、かろうじてそれが可能だった。

被爆者が語れなくなり、被爆の痕跡を残す「被爆建物」も次々と姿を消す中で、行政も被爆体験伝承者制度と呼ばれる施策を打ち出すなど、試行錯誤を続けてきた。広島市には「被爆体験継承担当課」や「平和推進課」なる部署も存在するが、とりあえずの仕組みはあるというもの、将来的なビジョン、基盤は脆弱であり、それらがうまく機能しているとは言い難い。誤解を恐れず言えば、所詮「役所の考えること」であり、融通が利かず、何より人に対する「愛」がない。市に登録していない被爆者には、被爆証言のオファーが来ても斡旋しない、伝承者に対しては、語る内容や文言に微に入り細に入り厳重なチェックをかけるなど、いったい誰のために？何のために？という事例が聞こえてくる。記憶の継承は、待ったなし。わかっているようで、わかっていないのだ。

「体験のない人には、語れないのでしょうか」と質問されたことがある。今の時代、例えば「戦争体験がある、被爆体験がある」というより、「ない」という人が圧倒的多数を占める。では、自分の体験を「人に伝えるように語れる」ための体験年齢とは何歳だろう。0歳から3歳はほぼ記憶がないと考えるのが妥当とすれば、77年前の4歳でも、現在は81歳。当時をしっ

かり記憶し、順序立てて語る人とは言えば、必然的に80代後半から90代となる。加えて、77年も経てば、当然のことながら記憶も薄れていく。

「体験」の概念を考えると、行きあたる壁は多くあるが、将来的な突破口もまた多い。例えば、この8月5日・6日に広島で上演された子どもたちの演劇。何人もの被爆者から何度も話を聴き、それらをもとに脚本を書き、演出し、表現する。ワークショップから始まったもので、大人の手も入るが（もとより、その大人も戦後生まれ）、基本は、子どもたちが「聴いたこと」を「体の中に取り込み、考え」、それを「体を使って表現する」ことで、被爆者の体験を自ら二次的に「体験」し、伝える…そんな試みだ。被爆者の体験を、次の誰かに「手渡すという体験」、と云えばいいだろうか。ここで有効なのは、身体性。自分の体を動かすことで得られる何か、である。

ご覧になった方もおられるかもしれないが、全国でこの夏、上映されたドキュメンタリー映画『長崎の郵便配達』にも手がかりがあった。この映画は、第二次大戦時に英空軍のパイロットとして活躍したピーター・タウンゼント氏が、世界一周の旅の途上、長崎で出会った被爆者に取材したノンフィクション小説が基になっており、タウンゼント氏の娘が、父の残した「メッセージ」を求めて、長崎を訪れた記録である。原爆の劫火に背中を焼かれた郵便配達の少年、タウンゼント氏、その娘イザベル、そしてタウンゼント氏の孫娘たち（彼女たちは、フランスの仲間とともに演劇で少年の記憶を伝える）、この映画を撮った女性監督。郵便配達の少年の記憶、痛み、勇気、生き抜いてきた日々が、それらの人々の手から手へ、世代を超えてトーチリレーのように受け継がれていく様は、まさに新たな「体験」であり、継承の形を見る思いがした。メッセージを受け取った者は、今度は自分がメッセンジャーとなって、次に思いを伝えるのだ。郵便配達の少年だった谷口氏が、晩年に国連の議事場で声を振り絞った、「NO MORE HIBAKUSHA, NO MORE WAR」のメッセージを、私たちひとりひとりの郵便カバンに詰めて。

それでは筆者とは云えば、子どもの本を書く、という仕事を通して、被爆者から体験を聴く「体験」をする。資料を読み解く中でも同様に。そしてその重みに抗いながら、書くという行為の中で、新たな体験を重ねる。実際に体験した人のそれとは、もちろん比ぶべくもない、まったく異質のものであるが、そうしていくことでしか、筆者はメッセンジャーになれないのだ。14万人という犠牲の数字ではなく、そのひとりひとりの個人の物語を、あるいは体験を想像し、創作しながら、見えない嘆きを見えるように、少しでも見えるように、と。

戦火のやまない世界にあって、歴史を学び、戦争、侵略、核の脅威について考え、それらの記憶を継承することは、今だからこそ、ひとりひとり、地球上に生きる者すべての問題であると自覚したいものだ。何もかもが、気がつけば待ったなし。そんなことを思いながら、鬱々と過ごした夏が終わった。

そして、私たちの次の季節は？

国を守るとは？

郷農 彬子

平和ボケ。これはよい事なんですか？

ノーベル平和賞に「日本国憲法第9条」を推そうという動きがありました。結構多くの日本人が、戦後70年以上平和でいられたのは、平和憲法のおかげだ、と思っておられるらしい。それを知ったとき、日本人の平和ボケを実感したのです。なぜこれまで長い年月、平和でいられたのかについては、別途検証しないと理由を突き止めるのは難しいでしょう。

でも私は、憲法第9条のおかげとは思いません。日本が戦争を仕掛けることは、確かにありませんでしたが、もし外敵が侵略してきたら、戦争は容易に勃発したかもしれない、と思います。外敵はむしろ、日本は侵略に弱いだらう、とすら思うでしょう。

1972年初めに、アメリカのテキサス州に住むことになりました。夫がテキサスの大学と契約して、研究をすることになったのです。人口3万に満たない小さな町です。しかし、軍が資金を出している大学で、兵

役からもどってきた多くの若者たちが学んでいました。その町に小さな飛行場があって。長男は滑走路をタッチ&ゴーする飛行機を見るのが大好きでした。陰鬱な灰色のプロペラ機は、町の上空を旋回しては、もどってきて、タッチ&ゴーをくりかえします。そのうちに、なんでいつも上空を旋回しているのだろう？という疑問を持ちました。そこで、アン・コーベットに訊いてみました。ご主人は軍人です。答えは「いつ敵の飛行機が飛来するかわからないから、いち早く対応するために旋回してる」というのです。テキサスはキューバに近いこともあり、そういう危機感をもっているんだなあ、と思った次第でした。とはいえ、朝鮮半島の方がずっと日本に近い！！

3年後、夫は次に西ドイツ国立原子力研究所と契約して、ユーリッヒという町に引っ越しました。こちらにも、人口5万人足らずの小さな町です。上空を旋回している飛行機はいないけれど、1週間ほどした時に、町中にけたたましいサイレンが鳴り響きました。それは、「何事が起こったのだろう」と驚くほどのものだったのです。すぐに私はお隣のドアを叩きました。「ミセス・ルッツ、いまのサイレンは何でしょうか？」

彼女は落ち着いて言いました。「大丈夫、あれはね、サイレンを試しに鳴らしてるの。事前に連絡があってね、〇月〇日の何時にテストしますよー、と回覧がきていたのよ。本当に必要なときに故障して鳴らないといけないから、テストしてるわけ。」

ふーん、そうだったのかと安心はしたものの、待ってよ、これが本当の警報だったら、私たちのような外国人は、どうすればよいのだろうか？「ルッツさん、いまのサイレンの意味を教えてくださいませんか？」

「あれはね、500km先から核弾頭を積んだ爆撃機がこっちへ向かっているから注意せよ、という意味なの。」

ヒューッ！！！！「ど、どうすればいいのですか？そんなときの対処は？」

ルッツの奥さんはよどみなく答えてくれました。

まず第一に、できる限りたくさんのお水、まだ汚染されていない水を蓄えること。

次に、窓とカーテンを全部締めること。人間は地下室に逃げてください。地下室には、食料品も蓄えてありますよね。

ドイツにいた4年間に色々なお宅を訪ねたけれど、アパート形式の住居はもちろんのこと、個人住宅もすべて地下室を備えていました。つまり地下室はワインやジャガイモの保管場所のためだけではなくたのです。

しかし、そこまで防衛意識をもつのは何故なのか？一番の問題は、お隣さんが敵かもしれない、という点にあるのではないのでしょうか？40年以上まえに帰国しましたが、横浜から車で千葉の友人宅にゆくのに、東京を通過しながら、なんだかヨーロッパに似ているなあ、と思ったのです。ドイツからベルギーを通過してフランスに行くのと、似ていたからです。日々の生活で、もしお隣の県が外国だったらしんどいでしょうね。いつ何時、なにが勃発するかわかりませんから。だから外交に力を入れる必要もあるというわけでしょう。厳しい現実といわざるをえません。

「防衛意識」について書いてみたいと思い始めたとき、素人の私に何が書けるのかとはなはだ心配になり、急遽「民間防衛（あらゆる危険から身を守る）」という本を注文しました。スイス政府編、1,500円の厚い本です。この本を読んで、驚嘆いたしました。なんとシステムティックに、淡々と「戦争への備え」を説いていることか。

スイスにとって、有事は普通のことのようです。それに備えることも当たり前の事にすぎません。たとえば核兵器が使われたとき、どのような現象をみれば、核兵器だったかどうか判断がつくか、絵入りで説明。添え書きには、「核兵器および化学兵器に対して国民を防護するため、軍と民間の防衛組織には優秀な研究所を備えた対策班がある。これらの防衛組織は、敵が使用した化学物質を発表し、危険地域に警告を発し、ラジオおよび電話でその物質の危険な特性を指摘して、とるべき措置を指示する」と書いています。最新の通信機器が含まれてないのは、この本が第40刷りの古い本だからでしょうが、これほど前からこれだけの心構えを説いている事に、驚きを禁じえません。

スイスは世界に名だたる「永世中立国」です。

「民間防衛」の冒頭に、「本書は、スイス連邦内閣の要請によって連邦法務警察省が発行したものである」という断り書きがあります。また、まえがきには、「国土の防衛はわがスイスに昔から伝わっている伝統であり、我が連邦の存在そのものにかかわるものです。そのため、武器を取りうるすべての国民によって組織され、近代戦用に装備された強力な軍のみが、侵略者の意図をくじき得るのであり、これによって、我々にとって最も大きな財産である自由と独立が保障されるのです。」と書かれています。

考えてみれば当たり前のことですが、振り返って我が国（日本）で、このような文言を聴かされたことはあるかという、一般国民にとっては、NO ではないでしょうか？さらに、下記のように述べられています。「この本は、我が国が将来脅威を受けるものと仮定して書かれたものである。我々が永久に平和を保障されるものとしたら、軍事的防衛や民間防衛の必要があるだろうか？すべての人々は平和を望んでいるにも拘わらず、戦争に備える義務から解放されていると感じている人は誰もいない。歴史が我々にそれを教えているからである。」

この本は、国民の心構えにも言及しています。つまり、巧言令色を弄して近づいてくるスパイに気を付けるように、とか、いつのまにか反政府的な思想を植え付けられて、反対勢力に組み込まれないように、などの注意事項が事細かに書いてあるのです。

この本を読んで、自分の国を守るとは、こういう事だったのだ、と気づかされました。論議が浅くて申し訳ありませんが、ご容赦頂ければ幸いです。

安全保障を俯瞰しよう

神倉 力

ウクライナへのロシア侵攻によって世界中が軍拡競争へ向かっている。日本でも核シェア論や反撃能力（敵基地攻撃能力）の保持、防衛費を GDP の 2% 以上にしようという声が当然のように高まっている。そういう人たちは NATO 加盟各国は 2% なのに、日本は劣っ

ていると主張する。待ってほしい。NATO は旧ソ連に対抗するための軍事同盟だ。同盟国はいわば「戦争する国」である。それに対し日本は憲法で「戦力を保持しない」と決めた「戦争しない国」である。同列に論じるのはおかしいのでないか。

防衛力を強化しようという人たちは、国際環境が変わったから、それに応じた軍備を持たなければならないという。なるほどと同調しそうになるが、それは国際環境を軍事面だけから見ているだけだ。国際環境の変化は軍事面だけではない。中国が世界第 2 の経済大国になり、日本もアメリカも対中貿易が 1 位である。その他の国も経済的に中国と対立できない。今や、米中戦争なんて口で言うだけで、どちらもできない。

国民の安全を脅かしているのは軍事面だけではない。新型コロナによって人が死んでいる。世界では 640 万人以上、日本でも 3 万人以上が死んでいる。戦争の惨禍以上だ。台風は毎年来るし、大雨被害も大きくなっている。地震も毎日ある。日本の食料自給率はたった 37%。世界で食料不足が起これば日本は飢饉になる。経済的理由で自死している人も増えている。原生林は伐採され、アフリカの砂漠化が広がる。環境汚染や地球温暖化も人類の安全を脅かしており、各地で大洪水や山火事が増加している。北極・南極の氷が融け太平洋の島国は絶滅の危機に瀕している。貧困や格差、差別・不平等、断絶も人々の安全を脅かす要素である。

日本についていえば、戦争が起きれば惨禍は絶大だろう。だが、それはいつ起きるか分からないし、起きないかもしれない。それより、今日の前で死んでいく人たちへの防護をしないで、何が安全保障なのか。軍事費を GDP 比で 2% まで増やすなら、防疫、防災、食料自給、温暖化対策などの GDP 比をどうするのか、その配分を検討せず、軍事費だけ増やしても国民の安全は保障できない。国として配分を検討すべきである。軍事費増大は感情的議論である。国家の力点をどこに置くのか。もっと理性的、俯瞰的に先見性を持った議論をすべきである。

今こそ、メディアは日本の在り方について問題提起してほしい。

鎌倉暮らし 22 鎌倉アルプス

大築立志

鎌倉は、南を海、西北東の三方を天然の城壁のような急峻な山に囲まれた小さな盆地である。そして、ここが元々源氏父祖伝来の地であった（274号参照）ことから、源頼朝が新政権の本拠地としたのである。その鎌倉時代の鎌倉を囲む山々を西から東へ時計回りを見てゆくと、まず七里ヶ浜と由比ヶ浜を隔てる稲村ヶ崎を起点として北へ向って、極楽寺、大仏、葛原ヶ岡（源氏山）へと伸びる西部山稜があり、これが葛原ヶ岡を過ぎると北鎌倉の浄智寺、建長寺の裏山を回り込みつつ東へ向きを変え、北部山稜として鶴岡八幡宮の背後を東進して、大平山（おおひらやま）というピークに達する。そして大平山から南下する東部山稜が、瑞泉寺、浄妙寺、報国寺、安国論寺、長勝寺、光明寺などの古刹の裏山を形成して光明寺のすぐ近くの飯島崎から逗子市小坪に続くあたりで海に突き当たって終わる。

これらの山稜の尾根筋には、現在では鎌倉市によって3つのハイキングコースが設定されている。西部山稜の大仏から葛原ヶ岡を経て浄智寺に至る葛原ヶ岡・大仏ハイキングコース、北東部山稜の建長寺から大平山を経て瑞泉寺に至る天園ハイキングコース、東部山稜の中央部付近から西に撞木状に突き出た小支脈にある祇園山ハイキングコースの3つである。鎌倉検定の公式テキストブックでは、この中の天園ハイキングコースが「鎌倉アルプス」と命名されているのだ。

天園というのは、日露戦争でロシアのバルチック艦隊を日本海海戦で撃滅した連合艦隊司令長官東郷平八郎元帥が、大平山山頂付近の風光を愛でて、天上の樂園のようであるとして付けた名前だという。その辺りは平坦な台地の端のような場所で、横浜市と鎌倉市の境界になっており、横浜市側の山上広場には「横浜市最高地点 大平山尾根 海拔 159.4m、山頂は鎌倉市域」という説明板がある。そして、そこから 500mほど西の天園ハイキングコース沿いに「大平山 鎌倉市最高地点」という手書きの小さな表示板が設置されているのだが、そこに書かれている標高は海拔 159.2

mで、横浜市最高地点より 20 cm 低い。ここが横浜市の説明板に書かれている鎌倉市域の大平山山頂であるなら、尾根より低い山頂って何？ この表示板は、よく見れば「山頂」とは書かれておらず、その背後の眼下に広がる鎌倉カントリークラブというゴルフ場のクラブハウスとの境界フェンスに取り付けられていて、地図で見るクラブハウス周囲に残る等高線の間隔が非常に狭いことを考えると、このクラブハウスを建てる時に本当の大平山の山頂部が削り取られてしまった可能性もあるが、詳細は不明である。

この3コースの中では天園コースが最も長くて展望もよく、アップダウンも露岩部も多いのは確かかもしれないが、長さと言ってもせいぜい天園が4キロ3時間、大仏が3キロ1時間半、祇園山1キロ30分（鎌倉検定テキスト）位のものだし、美しいお花畑があるわけでもなく、険しい岩道と言っても雨などで濡れると滑りやすいので気を付けなければいけないのだから、「アルプス」は言い過ぎじゃない？と思っていたのだが、隣の逗子市と葉山町にも三浦アルプスというのが出来ているという話を聞いて、調べてみて驚いた。インターネットで検索すると、日本アルプスを除く全国のご当地アルプスの一覧表まで作られていて、70を超えるアルプスがあることがわかった。

本家本元のヨーロッパのアルプス山脈とどの程度の類似点があるのかが気になったので、地図を見比べてみたところ、意外な事実が明らかになった。アルプスと言えばまず真っ先に、スイスとオーストリアの南部、およびフランス東部とイタリア北部に聳える巨大なアルプス山脈が思い浮かぶ。ところが、世界地図をよく見ると、このアルプス山脈はスイスから西隣のフランスに進入したところで最高峰モンブラン山（4810 m）を形成した後、フランスとイタリアの国境を形成しながら緩やかな円弧を描きつつ南下して地中海まで達している。

イタリア・フランス国境線が地中海と交わる地点のすぐ東（イタリア）には音楽祭で有名なサンレモがあり、すぐ西（フランス）には、モナコ公国、ニース、カンヌといった超有名な観光地がひしめくように並

んでいる。フランス側の海岸はコートダジュールと呼ばれ、さらに西のマルセイユ付近まで続いており、イタリア側の海岸はリグリア海岸と呼ばれ、ジェノヴァを過ぎてリグリア湾（ジェノヴァ湾）の東端ラ・スペツィアに至る。この両海岸を合わせた海岸一帯が有名なリビエラ（リヴィエラ）である。サンレモ、ジェノヴァ、ラ・スペツィアはリグリア州という沿岸の州に属していて、北に隣接するピエモンテ州（バローロというワイン産地で有名）と共にフランスとの国境を形成している。そのため、このアルプス山脈の西の最南端部はリグリア・アルプスと呼ばれていて、れっきとしたアルプス山脈の一部なのである。

目を東に転じて見ると、アルプス山脈はオーストリアに進入したところで、南に分枝を出してスロベニアに進入してゆく。この分枝は、ジュリア・アルプス（スロベニア・アルプス）と呼ばれている。ジュリア・アルプスはさらに南東へと続き、クロアチア、ボスニア・ヘルツェゴビナ、モンテネグロ、セルビア、コソボ、北マケドニア、アルバニアを貫く大きな山脈となり、ディナル・アルプスと名付けられている。ディナル・アルプスはさらにギリシャに入ってピンドス山脈となってバルカン半島を南東に進み、ペロポネソス半島、クレタ島、ロードス島へと続く。

つまり、アルプスという名称は、スイスやオーストリア・イタリアの山岳だけではなく、地中海からバルカン半島まで続く長大な山脈に対して付けられた名称なのである。そこで、イタリア半島を西の付け根ジェノヴァと東の付け根ヴェネツィアを結ぶ線で切り落として、造山運動みたいにヴェネツィアをジェノヴァまでぎゅーっと近付けてみると、西のリビエラ海岸から北上してモンブランで東へ曲がり、オーストリア・イタリア国境からスロベニアを経て南東のギリシャへ向かう山脈の形が、この鎌倉を取り巻く山稜の形と非常によく似ていることが分かるのである。

すなわち、ジェノヴァを鎌倉に見立てると、稲村ヶ崎から北上する山稜はリビエラ海岸からモンブランまでのリグリア・アルプスと南西アルプス、八幡宮の背後を東進する天園ハイキングコースがスイス・オー

ストリア・イタリアのアルプス本体、天園から南下する東部山稜とその背後から南東に広がる三浦半島の山脈がジュリア、ディナル両アルプスにぴったりと当てはまるのである。

稲村ヶ崎の西には、七里ヶ浜、腰越、江の島、さらに辻堂、茅ヶ崎、平塚、大磯と、いわゆる湘南海岸が続く。ジェノヴァをJR鎌倉駅、稲村ヶ崎を伊仏国境として、地図の縮尺を当てはめてみると、江の島がちょうどマルセイユに相当する。ということは、江ノ電稲村ヶ崎駅から隣の七里ヶ浜駅との間（約1 km）にモナコとニースとカンヌが入ることになる。鎌倉市は真ん中のニースと姉妹都市であり、このあたりは海岸沿いに温泉や洒落たリゾートホテルやレストランが並んでいるから、何となく筋は通っている。また、鎌倉の東隣逗子市小坪にはリビエラ逗子マリーナというプレジャーボート専用港湾リゾート施設があり、これも本場のリビエラ海岸の東端に相当する位置にある。

さらにまた、前述の天園ハイキングコースは、建長寺の境内奥の長いつづら折れの石段を330段ほど昇りつめた勝上巖（しょうじょうけん）という西部山稜北端のピークを起点として東へ向かうが、このピークからは西方にも尾根が伸びていて、そちらをたどると六国見山（ろっこくけんざん：標高147m）という住宅地に接したピークに到達する。武蔵、相模、伊豆、上総、下総、安房の六国が見晴らせる展望台があり、眼下の峰々を彩る山桜と南の海と西の富士山が美しい山だが、この山の配置がフランスの平野に突き出した本家アルプスの最高峰モンブランの配置とそっくりなのである。

このように考えれば、何も鎌倉アルプスを天園ハイキングコースだけに限る必要はなく、むしろ鎌倉を取り巻く峰々をすべて鎌倉アルプスと呼んでもいいのではないだろうか。そして、ニースだけでなく、モナコやカンヌ、ジェノヴァやラ・スペツィア、モンブランの麓のシャモニー・モンブランなども姉妹都市になって、観光と環境の調和した国際SDGs文化都市を目指していただきたいものだと思うのである。

（編集 茂木）